



白百合の剣士 Vs 黒薔薇の騎士

悦楽に散る断章コレクション

立ち読み版

小説 筑摩十幸 挿絵 助三郎

序文	〔ランドール領王国年代記〕より
断章Ⅰ	白き百合編
断章Ⅱ	黒き薔薇編
断章Ⅲ	百合と薔薇編

170 108 013 012

※本作品は

モバイル二次元ドリーム『白百合の剣士外伝 姉妹蜜戯編』
二次元ドリームノベルズ『二次元ドリームノベルズ外伝3 白百合の剣士墮つ』
二次元ドリームマガジンvol.46『白百合の剣士外伝 乳獄の姫君』
二次元EXノベルズ『二次元ドリームマガジン分岐小説集 淫虐の黒騎士ローザ』
二次元ドリームマガジンvol.56『白百合の剣士外伝 触悦の檻』

上記に掲載された作品を加筆・修正のうえで再構成し、
『断章Ⅲ 百合と薔薇編』に書き下ろし小説を追加した内容となっております。

登場人物紹介

Characters



ローザ・フリージナー

シュバルト神聖帝国を治める女皇帝。聖薔薇騎士団を率いて魔族とルハサン連邦から国を守る、騎士の顔も持つ。



ブリジット・ローゼンバーク ／白百合の剣士

ランドール領王国の第一王女でありながら、仮面をまとい“白百合の剣士”として奴隷商と戦う、金髪碧眼の少女。

レイラ

ブリジットとは腹違いの姉にあたる第二王女。奴隷商バスクと組んで、ブリジットを罠に陥れる。

メリル

幼くあどけない容姿に反して、邪悪な魔力を用いてローザの肉体を狙う、ルハサン連邦の皇女。

「うう、降ろしなさいっ！ ああ、股が裂けちゃうっ！」

さらに鎖は両脚を割り裂くように引つ張り、王女の身体はほぼT字型に空中に固定されてしまった。スカートが捲り返り、下着をつけていない秘園が完全に露わになる。身体が柔らかいブリジットでなければ脱臼していただろう。

「オ、オマンコが丸見えだよ、ヒヒヒ」

「でも僕らはそっちに興味はないのさ」

兄弟の手が軽装服の胸の部分をビリビリと引き裂く。すると裂け目からバケツをひっくり返すような勢いで乳白色の肉塊がまろび出た。わずかな時間に二回りは成長させられており、かなりの重量感がタップと揺れる様は壮観である。瓜ほどの大きさに膨れた乳肌は静脈を浮かせて透き通り、柔らかくそうに息づいている。赤く充血した乳首は親指ほどの大きさに勃起し母乳の滴を滲ませている。

「ああ……こんな……」

人並み外れた巨乳にされてしまい、狼狽える王女。肉体を玩具のように改造されていく恐怖に戦慄するが、奴隷王女には嘆く時間も与えられない。

「でも、まだまだ物足りないねえ」

「これから爆乳の牝牛に改造してあげるからね。いつでもオッパイを搾られないと我慢できない身体になるんだ」

巨乳程度では満足しないのか、変態兄弟が手にとったのは大きなガラスの筒で、白濁し

た液体が充填されている。嘴管しかんが細い以外は浣腸器にそっくりであった。

「まずはこれからだ」

「ああ……か、浣腸なんていやよっ！」

おぞましい肛門責めを思い出した姫剣士が逆さの美貌を左右に振るが、陵辱者たちの狙いはそこではなかった。

「お尻なんて興味ないって言ったでしょ」

「ヒヒヒ。僕らの狙いはここだけさ！」

兄弟が突き出した嘴管が乳首の先端を捉え、そのままゆつくりと沈み始めた。

「うそ！ あきやああああああっ！」

細い氷柱を突き通されるような異様な感覚にブリジットは絶叫する。驚いたことに乳首が拡がって、責め具を呑み込んでいくのだ。くつろげられた乳首からは波紋のように快美の波が拡がり、胸郭がゾクリと震えた。

「おっと、暴れるとガラスが折れて大変なことになるよ」

脅迫されてハッと身を硬直させる。苦痛はないが、乳房の中に感じる硬く冷たい異物はまったく未知の感覚だ。すぐにでも振り払いたいところだが、今はジッと堪えるしかない。「イヒヒ。いい感じにほぐれているねえ。でももつともつと大きくしてあげるよお」

嘴管を根元まで押し込んだサブリが、シリンドラーをジワジワ押し始めた。筒内の液体がドロリと渦巻き、乳房の中へ送り込まれてくる。

「あつ、あああああつ！ そんな入ってくるうっ！ あ、ああ——ッ！」

一転して熱湯のような熱さが乳輪を中心にして燃え広がった。乳房に液体を送り込まれるなど、信じられない事態だった。

「これは乳腺を活性化させる薬さ。オッパイも大きくなって、母乳の出もよくなるんだ」
説明しながら兄もシリンダーを押し続ける。ドクドクと注入される母乳媚薬が乳腺に染み込んで、双乳全体が燃えるように熱くなる。さらに息苦しい圧迫感が膨らむにつれて、母乳自体もその大きさを増していく。

「ああ……大きくなって……ううう……もう……い、入れるなあつ！ あふうん」

逆さ吊りで赤くなった美貌を振りたくる。しかし嘴管は深々と突き刺さったまま、冷酷に母乳を注入し続ける。逆流される薬液に乳腺がジンジンと痺れだし、ブリジットの母乳と混ざり合って乳肉の中で渦巻いた。未知なる乳悦と苦しさに、胸の谷間に夥しい汗が噴き出す。

「百……百五十……二百……ヒヒヒ。まだまだ入るよお、ブリジットちゃん」

狂った笑みを浮かべる口元から涎を垂らし、グイグイとシリンダーを押し弟王子。対照的に兄はじつくり染み込ませるようにジリジリと注入してくる。

「うあああ……く、くるし……ううっむ」

乳房がまるで風船のように膨らんでいく。乳肌もパンパンに張りつめて、今にも破裂してしまいそうだ。苦しさと乳悦とが乳房の中でドロドロに混ざり合い、灼熱の坩堝るっほのよう

に王女の理性を溶かそうとする。

「三百……三百五十……やつと僕らの理想に近づいてきたよ」

「あ、あ……もうやめなさい……ひああ」

仮面の下で流麗な眉が折れ曲がる。ズッシリと垂れ下がる重さで乳房がちぎれ落ちてしまっただ。

「四百五十……五百……よし、全部入った。まず大きさは合格だね」

「ハアハア……胸が……はう……こ、こわれちゃう……んっふうっ」

左右にたつぷりと媚薬を注がれ、ブリジットは息も絶え絶えだ。全身、油を塗ったように汗に濡れて、伸びきった両脚の先でつま先がピクピク痙攣している。そのくせ媚肉は牝蜜を溢れ返らせて濡れそぼり、嘴をくわえたままの乳首もぶつくりと尖って官能の昂りを見せつけた。荒い呼吸を繰り返すたび、爆乳がプルプル揺れるのも扇情的だ。

「ちよつと母乳を見せてもらうよ、それっ！」

休む間も与えず注射器が引き抜かれた。内圧に押された母乳が一気に乳腺を駆け上がり、乳頭へ殺到する。

「ひいっ！ いやあああっ！」

プシャアアアアッ！ ビュルルウツ！

噴水のような勢いで、白濁母乳が二本のアーチを描き出す。堪えようと身構える暇もな

く、ブリジットは射乳の激感に悶え狂った。

「はううう……お乳が……んんむうっ」

息詰まる圧迫からの解放と、熱流が乳首をくぐり抜けていく法悦とが混ざり合い、王女を生まれて初めての乳快感に歯を食いしばって必死に堪えた。

「すぐく感じるだろう。男が射精するより気持ちいいはずだよ」

「あああっ！ 止めて、もう止めてえっ！」

錯乱の悲鳴を振りまいて、吊られた身体を足掻かせる。しかしどこに力を込めても母乳を止めることはできない。爆乳をタップンタップンと跳ねさせて、噴乳の勢いを増すだけだった。

（ああ……こんな……何かが……胸の中で）

どす黒い炎が胸の奥を灼きながら全身へ拡がっていく。子宮がキュウツと疼き、媚唇がひくひく痙攣しながら、濃厚な愛液を溢れさせた。脳内で火花が散り、抗えない衝動に意識が漂白されていく。

「おっと、そこまでだよ」

唐突にアーマンは乳首を摘んで射乳を中断させた。

「おや、ひよっとしてイキそうだった？」

「うう……そ……そんなわけ……ハアハア……ない」

もどかしさを押し殺し姫剣士は美貌を歪め、ギリギリと白い歯を噛み締める。乳房だけ

で気をやるなどあつてはならない。

「どうだい、花嫁になる気になったかい？」

「それだけは……い、いやよ……死んでも……お断りなんだからあ……っ」

ブリジットは気力を振り絞つて徹底抗戦を訴える。国の名誉に懸けても、こんな卑劣漢に負けるわけにいかないのだ。

「さすがブリジット姫。そう言うと思つたよ」

「いつまでその強気が保つか、楽しんでよ」

別の小型の注射器を手にとる変態兄弟。乳房を責めるのが心底好きなのだ。

「こ、今度は、これだね、兄さん」

注射器にはやはり白濁した液体が詰まっているが、さっきよりも粘度が高くドロドロしている。

「ククク、こいつはきついでよ」

「や、やめなさいっ！ そんなの使うな。無駄なんだからっ、ああうっ！」

抗議を無視して嘴管が再び乳頭に突き刺さる。キーツとシリンダーが鳴り注入が開始された。

「ううっ……またああああ……入ってくるう」

ドロドロと流れ込んでくる粘液が、かなりの重量感で乳房に溜まってくる。その重さの中に小さなざわめきを感じる。

(ああ……なに……これ……?)

まるで小さな虫が這い回るようなくすぐったさ。やがてそれは乳房全体に拡がり、猛烈な痒みへと変化した。

「うあ……ああ……かゆい……なに……なにをしたの……あああ……ひいいっ」

「こ、これはヤム芋を搾り下ろしたものだ。お乳の性感を上げる効果があるんだ。ヒヒヒ、ただしものすごく痒くなるけどね」

「あああっ！ そんなもの入れるなあっ！ あああああ！ かゆい、うう、かゆいっつ！」

言葉を聞く余裕もなく、ブリジットは全身を波打たせて悶絶し始めた。だが両手は後ろ手に拘束されておりどうしようもない。

「効いてるようだねえ、ヒヒヒ」

「正義の白百合の剣士様も、この痒さには堪えられないよ」

注入を終わった嘴管がチュポンと抜かれた。すぐに母乳が漏れないように、クリップが乳首に噛みついた。

「うああ……ああ……ひっ、ひいんっ」

膨乳による苦しさと凄まじい痒みに襲われて、ブリジットはもう息も絶え絶えだ。ブルブル震える乳肌に滝のような汗が湧き出し、金髪のポニーテールが力なく揺れている。血が上った頭の中に霧がかかって意識が朦朧としてきた。

「ああう……お乳の中があ……痒い……燃えちゃうっつ！ ひいん、痒いっつ！」

肩を震わせるたび、爆乳がちぎれんばかりにタプタプと上下に弾み、逆さになった美貌の頬を打つ。

乳房の中に猫じゃらしの束を突っ込まれてかき混ぜられているような強烈な痒みだった。そして姫が暴れば暴れるほど、ドロドロした熱い粘液が行き場を求めて乳腺の中で荒れ狂い、さらなる痒みを呼び起こす。

苦しさを表すようにつま先が何度も反り返り、真っ赤に上気した美貌を右へ左へ振り乱す。

「僕がかいてあげよう。ヒヒヒ」

背後から伸びた弟の手には鳥の羽で作られた刷毛が握られていた。

「ひっ、あ、あ……そんなもの……くひいいんっつ！」

狂わんばかりの搔痒感に苛まれている乳房の上を、触れるか触れないかの微妙さで羽毛刷毛が這い回る。

「ンあおお……ふうああっつ……んん」

麓から頂上へ、胸の谷間から外縁へ、フェザータッチを刻まれるたび魂が溶けるほどの快感が胸一杯に拡がり、鼻にかかった甘い声が漏れてしまう。

サリサリと擦られる乳肌があまりの心地よさに鳥肌立ち、乳房全体が静電気に包まれたように甘美な痺れに包まれていく。

背筋がますます反っていき、張りつめた双乳を刷毛に押し当てるようにしてしまう。淫

らな血流を集めて乳首がまた一回り大きく膨らんで発情姿を晒した。

「あつ、ああつ、ああああん」

「ヒヒヒ、気持ちよさそうだねえ、ブリジットちゃん」

姫剣士が初めて見せる媚態に気をよくし、サブリはさらに丹念に乳房を愛撫する。くすぐるような、微妙で丁寧な刷毛使いがピンピンに尖った乳首を撫で上げた。

「あ、ああん……だめえ……ああああんっ！」

サワサワと優しく焦らされて、ブリジットはブルブルッと乳房を揺さぶった。乳房の感度が数倍に跳ね上げられ、乳肌を撫でられるだけで、胸骨が砂糖菓子のように溶け崩れる。だが痒みの震源は乳肉の中だ。初めこそ痒みが和らいでいたが、次第にそれは隔靴搔痒のもどかしさに変わり、倍増した痒みで裡から王女を蝕み始めた。

（ああ……もつと……強くして……）

焦らすように責められるほど、乳肉の中で淫欲がジワジワと膨らみ、そんな浅ましい言葉が喉まで出かかって、慌ててブリジットは唇を噛む。乳狂いの兄弟にそんな姿を見せれば、なにをされるかわかったものではない。しかし仮面の下の瞳は妖しく潤み、なにかを欲しがるような媚びた潤いを浮かべていた。

「おやおや、物足りないって顔だね」

「もつとお乳を虐めて欲しいんだよね」

兄弟揃ってズボンから肉棒をつかみ出し前から迫ってきた。双子だけあって大きさや形

もよく似ている。

仮性包茎特有のピンク色の亀頭から強い牡臭が漂い、血管がのたうつ胸部は赤黒く膨れ上がっている。長さよりも太さが際立つ感じだ。

「うう……こ、これ以上なにを……？」

「最後の改造だよ」

戸惑う仮面姫の乳房に、熱い勃起が押し当てられた。パンパンに張った乳肌先走りを塗られ、グイグイと圧迫され、乳房の中に淫欲が荒れ狂った。

「んああ……やめなさい……あふうつつ……胸に触るなあ……ううう……痒いっ！」

ブロンドを振り乱し、ブリジットは仮面の美貌を歪めて訴えた。中途半端な刺激は、ますます隔靴搔痒の苦しみと射乳欲求を大きくさせるだけだ。

勃起乳頭は真っ赤に膨れ上がって、先走りのように染み出した母乳によって妖しく濡れ輝いている。さらに浅く口を開いた乳管から溢れるミルクは、二本の男根を濡らし乳白色のコーティングを施していく。その反応はまるで女性器のような妖艶さだ。

「フフフ。頃合いだね」

クリップが乳首からはずされ、やっつと出せると思った直後、母乳が噴き出るよりも早く亀頭があてがわれた。

「あああつ！ なにをする気っ!？」

「媚薬とヤム芋と精液が混ざること、この改造呪術は完成するんだ」

「オッパイだけでイク乳奴隷に僕たちのチンポで造り替えてあげるよ。それが僕たちの花嫁になる儀式さ」

「そんな花嫁なんて……ハアハア……絶対イヤよ」

「ククク、僕たち兄弟に逆らっても無駄だって教えてあげるよ。それえっ！」

そのままグンツと腰を突き出すと、驚いたことに勃起の槍先が乳頭に沈み始める。芋汁の粘りが潤滑になり、驚くほどスムーズだ。

「あひいっつっ！ う、うそおっ!? 入ってくる……ンはああんっつ！」

信じられない事態に絶叫が迸るが、それもすぐに津波のように押し寄せる乳快感に呑み込まれた。

「ここをオマンコより感じるように調教して、普通のセックスじゃ満足できない身体にしてあげるからね」

兄弟が揃って腰を突き出すと、鉛色の勃起がジワジワと乳房に埋まっていく。亀頭の楔形に沿って拡がったニップルが、最も太いカリを受け入れた直後、キュツと窄まって胴部に密着する。押し込まれた分だけ母乳が溢れ出て、幾筋もの白い筋が乳肌の上を滑り落ちていった。

「い、入れるなあ……あああ！」

掘削され押し広げられていく乳粘膜からはこの世のモノとは思えない快楽が溢れ出して、全身の神経を灼き焦がす。兄王子の言う通り、膣孔を穿たれるよりも気持ちよかった。し

かもそれが二つあるのだからたまらない。

「あひいつ！ イヤ……ヒイ、イイイッ！ 壊れる……あとおおつ！ お乳が……壊れちゃうっ！ こんなのだめえっ！」

敏感な乳腺を押し広げ、噴き出しそうな母乳を押し返しながら剛棒がジワジワと埋まつてくる。まるで灼けた鉄棒をねじ込まれるような凄まじい圧迫感だ。乳肉を貫通され心臓まで串刺しにされてしまいそう。

乳首は限界近くまで拡張されてまるで火山の噴火口のようにポツカリ口を開いている。溶岩のかわりに漏れ出るのは、本気汁のように粘る特濃の母乳だ。

「よし、これで全部入ったよ」

「おおっ。すごいよ、ブリジットちゃんの中、温かくてヌルヌルだあ」

根元まで勃起を埋め込み、兄弟は感激に腰を震わせる。勃起に絡みついてくる豊かな乳脂肪の熱さ、柔らかさはヴァギナを凌駕する抱擁感で、下半身すべてを呑み込まれているような気持ちになつてくる。

それでいて乳頭部分の締めつけは極上で、男根の根元を断続的に食い締めては、射精を促すようにヒクついている。

肉体的快感に加えて、求婚をあつさり断つた生意気な姫をついに我がモノにしたという征服感が牡の情念を刺激する。愛憎混ざり合う複雑な感情は、乳姦の快感をいつそう大きくしてくれるスパイスだった。

「あ、ああ……あああ~~~~ンツ」

（私……とうとうこんな淫らな身体に……）

ブリジットは絶望と同時に、これまで感じたこともない法悦に酔いしれていた。ズーンと胸一杯に響く快美の波動は魂にまで届きそう。脊椎を震撼させ、脳幹までも痺れさせる禁断の快楽だ。

さらに二つの亀頭がやつと痒みの中心に届いたことが心地よくて仕方がない。地獄の搔痒責めを癒された悦びに、潤んだ碧眼から随喜の涙までこぼしてしまった。

「いいぞ、どんどん感じるんだ。感じれば感じるほど、理想の乳奴隷に近づくんだからね」
「あう……こんなあ……乳奴隷なんていやなのに……ああ……お乳が……す、すごい……うううんっ」

心と裏腹に待ちわびていたように乳粘膜が男根に絡みつぎ、乳首がクイクイと食い締める。双乳がブルンツと大きく震え、勃起との隙間から白濁母乳がドプツと溢れ出る。もはや王女の乳房は完全な性器だった。

「おお、こんなに締めつけてくるなんて」

「すごい。こんな気持ちいいオッパイマンコは初めてだよ」

勃起全体を乳脂肪に優しく包まれ、吸引されて兄弟は揃って驚きの声を上げた。本来そんなところに筋肉などあるはずはなく、乳責めに馴れた彼らでも初めての体験だ。

乳肉がペニスを揉みほぐし、膣壁のように締めつけ、唇のように吸引する。パイズリと

フェラチオとセックスの快感を同時に得る極上究極の名器だと言えた。

「これは……奴隷の刻印か……なるほど」

爆乳の谷間に赤いハート形の紋様が浮かび上がっていた。それは姉姫に刻まれたモノでひとたびこれが浮かび上がると、王女は淫欲に取り憑かれ、精液が欲しくて仕方なくなる。その渴望が乳房をも変質させ、淫らな吸精器官へと変貌させたのだろう。

ジュボッ……ズブ……ジュボボ……ッ！

男根に馴染んだのを確認し、兄弟は揃って腰を加速させた。

「あ、ああああっ！ ヒイイッ！ そんなにしないで……あああう……はげしいっ！ ダメになるうっ！ あああんっ！」

牝と化した乳粘膜と勃起男根とが激しく擦れ合い、淫靡な水音を奏でる。飛び散る母乳から立ち上るミルク臭が、ブリジットと変態兄弟を昂奮させていく。

「フフフ。こちらで一回気をやらせるかな。オッパイに中出しだ」

「いよいよブリジットちゃんが乳だけでイキまくる牝牛になるんだねえ。ヒヒヒ」

「ひゃふうっ！ そんなのため、ラめえっ！ お、お乳の中に射精しないれえつつ……こ、これ以上されたら……変になっちゃうっ……いやあん、あ……あああんっ！」

焦点を失った視線を彷徨わせながら、ブリジットは腰をくねらせ始める。サーモンピンクの膣孔が、まるで見えない肉棒に犯されているようにパツクリと口を開き、白く泡立つ本気汁を垂れ流している。扇情的にうねるお尻にも、胸同様に奴隷の刻印が浮かび上がっ

ている。まさに牝の官能を全開にされたような狂いようだった。

「ああ、なにかが……くる……む、胸から……きちゃうっ！」

熱い奔流がジリジリと身体の中心をせり上がってくる。それはこれまで何度もアヌスやヴァギナで感じさせられたエクスタシーの予兆だった。

（このままじゃ……お乳に射精されて……イカされて……乳奴隷にされちゃう……っ）

淫らな牝牛奴隷に堕ち、本当にこの兄弟の花嫁にされてしまうのではないか。恐怖に戦慄おのきながらも、双乳を串刺しにする二本の淫炎から逃れられない。全身の筋肉がピクピクと痙攣し、縛られた両手がギョッと拳を握り締める。脳内で真っ赤な火花が弾けて、唐突なまでに意識が天空に打ち上げられる。

「おおおっ！　いくよ、出すよおっ！　乳奴隷になるんだ！」

「オッパイのマンコに中出ししてやるうっ！」

兄弟の男根が息を合わせて乳肉最奥までぶち込まれた。乳房全体がさざ波立ち、小刻みなバイブレーションが勃起全体を包み込む。充血し痲るほど締めつけを増す乳首にギョウツと根元を搾られて、射精欲求が肉棒の中心を貫き睾丸を直撃する！

ドピュウウッ！　ドクドクドクンッ！

乳房の奥に突き立てられたペニスがものすごい勢いで脈動し、灼熱の牡精が撃ち込まれた。

「うあああああつっ！　いやあああああ！　あ、あついいっ！　あひいいっ！」



「本当に強いんだね。なによりも心が……その心が折れるところ、見てみたいな」
意識を失ったローザを見つめてメリルが妖しく微笑んだ。

「あつ、あうああ……この……も……もう、や、やめ……ンああ……！」

「もうイキそうだね、お姉ちゃん。今度はお尻で気持ちよくなっちゃったのかな？」

クスクスと嗤うメリル。あどけない目線が女皇帝の堕ちゆくさまを冷静に見続ける。

ここがどこで、囚われてどれだけ経ったのか正確にわからない。全身にまとわりついた触手に責めまくられ、絶え間なく魔性の快感を味わわされていた。しかも一度もイクことを許されず、ずっと焦らされ続けていた。いかなる刀剣も弾く無敵の黒鎧も妖魔の媚毒には効果がなく、触手は唇や肛門はもちろん、尿道にまで根を下ろしている。

極限の焦らし責めに瞳は焦点を失い、苦しげに喘ぐ唇からは涎がダラダラと垂れ流しになっていた。

「フフフ、そろそろイカせてあげようかな？ これ見て」

酩酊状態のローザの股間に極太の触手が突きつけられた。太いだけでなくその胴部にはイソギンチャクのような繊毛がワサワサと蠢いている。

「今のお姉ちゃんは全身の性感が十倍くらいになってるの。この触手で責めたらどうなるのか、楽しみ」

「ハアハア……あああ……そんな……」

焦らされ続けて過敏になった肉体を責められたら、気が狂ってしまうかもしれない。しかし媚粘膜は刺激を欲しがって浅ましく牝蜜を涎のように吐き出してしまおう。

「ほらっ！　いくよ」

ズブツ、ズブズブツ！　ジュボツ！　ジュボツ！　ジュボオオツ！

高速で波打つ繊毛が粘膜を割り裂き、掘削し、抉り抜く。

「はひひいっ！！　いい、いいいいいっつ！！」

凄まじい振動に子宮が揺さぶられ、骨盤がガタガタにされる。ズボツズボツと激しい抜き差しを受ける蜜壺からは、かつてないほどの牝蜜が溢れ返っていた。

「あがああああつ！　ひやめ……ンおおおおおおおつ！」

予想をはるかに超える強烈な快楽電流で神経が焼き切れそう。意識は激しく明滅し、脳内に七色の星が砕け散る。これまで堪えに堪えていたエクスタシーの津波が肉を震わせる轟きとともに迫ってきた。

「ンフフフ。いい反応だねえ。でもまだおあずけだよお」

「そんな……あああああつ！　そんな……だめえ……っ」

急に極太触手を引き抜かれ、ローザは狼狽の声をこぼしてしまふ。それは鋼の意志を持つ女帝が初めて自ら漏らした、女らしい声だった。

「なにがダメなのかな」

「ハアハア……あ……ああ……」

浅く膺孔をくすぐられて、甘えるような喘ぎが聖帝の唇を濡らす。墮落させられる恐怖に戦慄しながらも、まったく逆のベクトルを持つ感情もこみ上げてくる。

「イキたいんでしょ。この触手で思いきり、最後まで責めて欲しいんでしょ？」

極太触手の先端が再び媚孔にズブリと潜り込む。身を裂くほどの拡張感が脳まで痺れさせた。最後の結界に守られた子宮がキュンキュン疼き出す。

「うああああ！ も……もう、やめ……こ、これ以上されたら……」

「やめてもいいの？ 素直になったほうがいいよ」

ジリジリと触手が後退を始めると、もう堪えられなかった。

「ううう……抜くな……ほ、ほ……欲し……いつ……さ、最後まで……してくれえっ」

イソギンチャク触手を逃すまいと腰が躍る。顎を突き上げ汗まみれの白い喉が反り返る。アクメへの渴望にすべてが支配されていく。

「ウフフ。もっといやらしく、女っぽく言ってよ、お姉ちゃん」

「ひいつ、はっ、ああっ！ 抜かないで……もつと、もつと……深く……うう……ローザの……オ……オ……オマンコ……抉ってえ……ああうううっ」

悔し涙を滲ませながら、腰を突き出しグラインドさせ、媚肉をギユウツと締めつけた。熱くとろけるような収縮が、触手に絡みつき食いちぎらんばかりに締めつける。

「よく言えました。ウフフ、でもお……やっぱイカせてあげないっ。残念でしたあ、アハハハ！」



意地の悪い嘲笑を浴びせる魔少女メリル。おぞましい触手はごく浅いところを弄るだけで、一番欲しい最奥にはまったく届かない。

「うああ……だ、だますなんてえ……ああ、ああっ！ 卑怯者お……ひつ、はひいん……こんなあ……く、狂っちゃうっ！ あああん……もつと、もつとしてえっ」

美貌を狂おしいまでに歪め、汗まみれの総身を揉み絞る。しかしどんなにローザが物欲しげに腰を振っても、極太触手はそれ以上責めてくる気配はなかった。

「感度が百倍になるまで焦らしまくってあげるよ。その後は人間たちに責めさせてあげる。聖帝様は守るべき民に貶められるんだよ。アハハハハッ！」

メリルの楽しい笑い声が、出口のない淫獄に響いた。

数日後、新教会本部の地下にある訊問室。

あの後ローザは莊園の村人を虐殺したとして捕らえられ、異端審問裁判にかけられた。裁判では、なぜか部下も村人も皇帝を魔女だと主張し、ローザは孤立無援だった。しかも真実を話そうとすると舌が痺れて話せなくなる。おそらくメリルになにかの術をかけたのだらう。それでもローザは自分が魔女だと認めなかった。

「そろそろ白状してはどうですか、陛下？」

いやらしい笑みを浮かべているのは、驚いたことにあの老司祭だった。

「私は……絶対に……屈しない……好きだけ責めればいい……神は私とともにある」

苦しげに答え敵を睨むローザ。全裸に剥かれ、水車の円弧の部分に頑丈な鎖でX字に固定されていた。さらに細いチェーンが頭上から伸びて鼻に取りつけられた『鼻輪』に繋がっており、顔を動かすこともほとんど困難であった。

「ふつ。さすが魔女はしぶとい。いいでしょう。ならばその身体に訊くまで」

老司祭の眼に狂った光が浮かぶ。その手に握られているのは極太の張り型であった。それをいきなり女帝の秘園に埋め込む。

「うあああああつつ!!」

触手に狂うほど責められて敏感になった粘膜に、染みるほどの快美感が走り抜ける。

「魔女は淫乱だといえますからな。これで感じれば魔女だという証拠」

司祭は心底楽しそうに歯茎を剥き出しにして嗤う。そして「回れ!」と命令を下した。

ゆっくりと水車が回転し、ローザの身体が頭上に向かって回転上昇する。

「やめ……ううあつ!」

水車の真上には数十本の蠟燭が燃え盛っており、溶けた熱蠟が雨のように降り注いだ。

「うう……あうう……熱い……くうつ!」

身体がほぼ水平になったところで水車が止まり、雪白の肌に包まれた乳房やならかな腹筋、女らしく熟れた下腹に、赤い蠟燭の花が咲き誇り、夥しい汗が噴き出した。魔法少女メリルによって超敏感に改造された肉体にはたまらない刺激だった。

(うあ……な、なに……?)

激しい責め苦に悶えていたとき、膾内の淫具が突然振動を開始した。すると信じられないことにそれまでの痛苦が、いきなり快感へと変化する。これも肉体改造の効果なのだろうか。

混乱している間に、水車が回り始めた。

「むう……ああ……こんな……」

今度は頭が逆さまになる。徐々に降下して逆立ち状態になったとき、強烈な鞭が襲いかかってきた。水車に連動して動く自動鞭だ。

バシッ！ バシッ！ パシィ—— ツッ！

「よもや感じているのではありませんか？」

司祭が狂ったように笑い、鞭が何発も肌に炸裂する。そのたび赤い蠟の破片がバラバラと飛び散り、汗が霧となつて散つた。

「うっ……くっ！ ちが……ああうっ……ああ……ンッ」

熱蠟に灼かれた肌を打たれるのはたまらなく辛かった。しかし先ほどと同じく、打たれた肌が妖しく火照り、淫気をさざ波のように発散させる。身体のうちがちが甘く痺れ、拡張された媚肉もピクピク震え出す。こんな拷問にも反応してしまう自分の身体が信じられなかった。

「いいぞ、いいぞ。回れ回れ！ ウハハ」

調子に乗ってきたのか、司祭が息を荒らげながら命じる。ギリギリと水車が回転し女帝

の頭が下のほうに近づいていく。円周の下三分の一は水槽になっており、大量の水水がプールされていく。

「やめ……んぐうっ！」

抗議など拷問装置が聞くはずもなく、ローザは頭から氷水に突っ込まれた。

蠟燭責めと鞭打ちで熱くなった肌が急激に冷やされる。急激な温度変化に全身の筋肉が悲鳴を上げた。さらに鼻輪をつけられた鼻孔からは水が流れ込んで、聖帝をさらに苦しめるのだ。

かなりの時間水中に放置され、ようやく引き上げられたときには寒さと酸欠で唇が紫色になっていた。

「ゲホゲホ……ハアハア……ッ」

苦しそうに深呼吸を繰り返すローザ。なんとという恐ろしい拷問装置だろうか。たった一周で何度も地獄を見せられたような気がした。こんな残酷なモノが教会にあったとは。

「まだ始まったばかりですぞ。フフフ」

老司祭が楽しみに嗤った。

それからどれほど時間がたったのか。水車の上で逆さづりになった黒薔薇の騎士の正面に老司祭が立っていた。下半身裸で、抜き身の男根で皇帝の唇を犯している。深々と貫いた亀頭は食道付近まで達し、まともに呼吸もできない。

「グフフ。クルワセテヤル」

「ヒッ！」

股間に擦りつけられたアルガウの男根を見て、ローザは息を呑んだ。子供の腕ほどもあろうかという巨大な肉棒には、さらに無数のイボが突き出している。まさに肉の凶器といった感じで、今この状態で責められたら一溜まりもないだろう。見ているだけで股間に戦慄が走った。

「や、やめろっ！ そんなものでされたら……こ、壊れてしまっ！」

慌てて腰を捻^{ひね}って逃れようとするのだが、呪鎖に縛られた身体は思うように動かない。

「イクゾ」

太い腕でガッシリと腰を固定され、規格外の巨根を膣孔に押し当てられる。その質量、硬さ、熱さ……どれをとつてもこれまで犯された男たちとは較べようのない逸物だ。

「や、やめ……うあ……あああ……やめろお……んくうあああ……っ！」

巨軀の体重を乗せ、メリメリと音がするような迫力で野太い肉の杭が垂直に膣洞に撃ち込まれてきた。

じゅぶっ……じゅぶぶっ……くちゅっ……ぐちゅんっ！

「はああ……やめ……さけるう……ああ……くるし……う、うううむっ」

鈍^なでも打ち下ろされたような凄まじい衝撃に、ローザは口をパクパクさせて背筋に痙攣を走らせる。これまで使われたどんな張り型よりも、太く長く硬い。とても人間の身体の

一部とは思えないほどだ。

「どうだアルガウのチンポは、天国に逝きそうだろう？ フッフ」

バスクの声を受けてアルガウの腰に力が込められ、極太の剛杭がズンツと押し出される。膣粘膜が出産時のように伸び拡がり、無理と思えた巨大亀頭がジリジリと埋まり始めた。

「うううああああ……ああああ……くううおとおおっ！」

尾てい骨が割れてしまうのではないかと思うほどの凄まじい圧迫感で、ローザは顎を反らして絶叫した。

（裂ける……壊れる……死んでしまう……っ！）

身体を真つ二つにされるような激感に貫かれ、網膜の裏側でバチバチと火花が散る。本当にこのまま殺されるのではないかと思った。

しかし調教された肉体はローザが思う以上の柔軟性を発揮し、恐ろしいほどの巨根を呑み込み始めたではないか。

周囲の粘膜を巻き込みながらイボだらけの巨根がズブズブと女体に埋まっていく様は、掘削という言葉がぴったりくるほどの、壮絶な光景だった。

「はあっ……やめろ……くうあああん……貴様あ……うううん」

どんなに抗おうとしても枷を嵌められた身体は言うことを聞かず、破壊的な陵辱を堪えるしかない。

「マダマダコレカラダ、ウオオオオオッ！」

アルガウの岩のような腰がズンツと押し出され、さらに重力加速度を乗せた一撃が最後の抵抗を打ち砕く。

「う、うあつ……はあううう……んああああ……」

そしてついに亀頭の一番太い部分が、括約筋の環をくぐり抜けた瞬間、ローザは氷の皇帝とは思えないほどの情けない悲鳴を上げ、白目を剥いて顎を仰げ反らせる。

「すごい、あんな太いオチンチンが入っちゃった」

「うっ……ううっ……見るなあ……ハアハアッ」

膨らんだお腹を弾ませながら、鞆のように熱い息を吐くローザ。羞恥と痛苦で肌という肌から汗が噴き出し、強張る指がシーツを裂かんばかりに強く握り締める。

「もつと力を抜けよ。俺とも楽しもうぜ」

ローザの様子を見ながら、バスクはブリジットの上にポジションを決めた。そして使い込んだ愛刀を少女剣士の蜜壺にあてがう。

「あああん……バスク……さま……きてえ」

媚びる眼差しで誘う奴隷姫に応えて、金鎖が飾る媚肉に一気に根元までぶち込んだ。

「うう……や、やめろ……もうこれ以上入らな……ふあああああつ!!」

異人の巨根に限界まで埋め尽くされた蜜孔に、もう一本男根を押し込まれる壮絶な激感に、ローザは絹を裂くような悲鳴を上げてしまう。本当にお腹が裂けてしまうのではないかと思うほどの、凄まじい圧迫感だ。

「枷で繋がっているからな。フフフ、こつちも二人分樂しめるぜ」

「そ、そんな……ばかな……ことが……んぐぐぐ……あああうっ！」

否定したくとも、バスクが腰を捻り円を描くように肉棒を操ると、ローザの膣孔は大きく口を開けさせられ、内側の媚粘膜も裏返るほど攪拌される。まるで見えない肉棒に犯されているかのようだ。そして技巧的な律動にアルガウの野性的な抽送が重なって、ローザを悩乱させるのだった。

「う、うああ……こすれる……な、膣内でえ……こんな、二本もお……はあああうっ」

「グフフ。牝メ」

ローザの女肉が燃え始めるのを感じ、アルガウも少しづつ本気で腰を振り始める。イボだらけの巨根で柔褻をこじ開け、小刻みな抜き差しを繰り返す。

ずぶっ……ぬぶっ……ずぶっ……ぬぶんっ……。

「あはあっ……あああ……う、う、動くなあ……あはあああ……んっ！」

極太に媚肉を捲り返らされるたび、甘美な電撃が腰椎を舐めてジーンツと下半身全体を痺れさせる。伸びきった粘膜を無数の肉イボに擦り上げられるのもたまらなかった。

(うああ……こんな……ことって……)

牡棒が圧倒的な質量で抜き差しされると、身も心も支配されていくような気がしてくる。この逞しい勃起の持ち主に逆らってはいけない気がしてくる。

「気持チイイカ」

「あうんっ……気持ち……よくなんかあ……んっんっ、あんっ、あはあんっ！」

ピッタリと腰が尻肌に密着し、巨根に子宮を押し潰されそうになる。そうかと思えばズルズルと後退して、内臓まで引きずり出されてしまいそうな寂寥感に襲われる。

その間も黒い掌が豊かな乳房をタップと揉み、痲ったクリトリスを指の腹で擦り潰す。パワーだけに頼らない、憎いほど絶妙なテクニクを駆使して聖帝を追い込んでいく。

「あつあんっ……はあつ……もう……あああんっ……やめ……はああんっ」

媚肉を二本のペニスで犯される責めに熟れた女体が反応しないわけがない。堪えようと思っても蕩けるような甘い声が喉の奥から溢れてくる。腰もいやらしくうねりだし、開きっぱなしの膣孔からは、愛液がポタポタと滴り始めた。肛門からも愛液が滲み出し、さらなる陵辱を促す。

「オオッ、イイゾ……モット感ジロ」

万力のような締めつけと綿のような柔軟性、相反する二つの要素を併せ持つ名器に包まれて、これまで何百人も女を泣かせた奴隷男も満足げに嗤う。そしてご褒美だといわんばかりに、鋭敏なポルチオ性感帯をちりばめた子宮口に丸太のような肉棒を連続杭打ちで撃ち込んだ。

「あつ……おおっ……おああああん……はげし……ああああん……だめえ……っ」

ズーンと重い衝撃が身体を貫通しベッドにまで突き抜ける。ベッドスプリングが軋み床が悲鳴を上げるほどの激しいファックに、ローザは呻きとも喘ぎともつかない生々しい牝

声を漏らすばかりだ。

もはや瞳は焦点を失い、緩んだ唇から涎が垂れる。押さえつけられた太腿とふくらはぎが痙攣し、つま先が反り返っていく。

「もう、イキそうだな。聖帝と牝がったところで、所詮は牝だ。お前もそう思うだろう、ブリジット」

「ああっ……はい……バスク様の仰るとおりです……ハアハア……ローザ様は……牝……私と同じ……いやらしい牝です……あつ、あああん」

バスクに求められるままに、ウツトリ恍惚の表情で卑猥な台詞を口にするブリジット。精悍な正義の剣士も今では妖艶な娼婦でしかない。

「よしよし、こっちは中出しでイカせてやる。うおらあっ！」

バスクは王女の恥骨の裏にある急所をゴリゴリと研磨したあと、蜜壺の最奥にまで突き入れ、情欲のマグマを噴出させた。

「バスク様あ……あああ……んっ！」

「ひいああっ！ そんな……中に……うあああああっ！」

ブリジットと同時にローザも牝声を迸らせる。枷鎖を通じて伝わってきた膣内射精の生々しい灼熱感が女の官能中枢を暴走させる。

「イケッ、アナル牝！ ザーメン浣腸ダ！」

息を合わせるようにアルガウが肉棒をいきなり引っこ抜き、肛門に龟头先端を浅く押し

込んだ。そのまままるで生きた浣腸器となつて大量ザーメンをアナルに注ぎ込む。

プシュッ！ ビュルルッ！ ドブドブドブウッ！

「ヒイ————ッ！」

膣内射精の感覚を味わわれながら、灼熱のザーメンを浣腸されて、屈辱と悦楽、牝楽と肛悦の混ざり合つた美貌が反り返る。収縮する括約筋が見えないバスクの男根と、アルガウの龟头とを同時に食い締めた。

「イクッ！ ああああ！ イクウ~~~~~~~~ッ！ ああああ~~~~~~~~ッ！」

銀髪を振り乱し、ビクンビクンと全身を痙攣させる。エクスタシーの余波が駆け抜ける手足が、臍を引きちぎらんばかりにキリキリと強張つた。

「うあつ……はあ……はあ……はあ……はあ……つ」

ガクンとベッドの上に身を投げ出すローザ。アクメ直後の淫靡な表情を憎い男たちに晒してしまふが、それを気にする余裕もなかつた。

それから半日が過ぎても、ローザはアルガウに貫かれたまま、休むことなく責められ続けていた。

精力絶倫の奴隷男は何度射精しても満足することなく、様々な体位で犯しまくる。上にされ、下にされ、うつぶせにされ……その間ローザは数えきれない絶頂を繰り返し、射精浣腸をされ、ほとんどイキっぱなしの状態だった。艶やかな銀髪が汗で貼りついた裸身は



眩しいほどに妖美な輝きを放っている。

「グフフ。モットイケ、牝メ」

後ろ手に縛られ、幼児がオシッコするようなポーズで胡座の上に乘せられ、上下に揺さぶられる。すべての体重が子宮に集中する苛烈な体位だ。

「ハアツ……ハアツ……イクウツ！ ひあうう……もう……抜いて……ンあああ……イクッ！ また……イクウ！」

おとがいを突き上げて、何度目とも知れないオーガスムに昇り詰めるローザ。何度失神しても揺り動かされて再びイカされる、無限の官能連鎖だった。

その前ではブリジットが他の奴隷男たちと同じ格好で向かい合わせに犯されていた。「あああん、もつとお……バスク様あ……もつとオマンコしてえ……おねがいですう」

墮ちきった王女は媚びた視線を肩越しに投げてウインクまでしてみせる。

「まったく淫乱なお姫様だな。オラアツ！」

「アアアアツ！ くるう……あ、あああん……ブリジット、イっちゃううッ！」

子宮の底にあるポルチオ性感帯をグイグイと突き上げてやると、ブリジットはボテ腹を揺すって絶頂する。そのエクスタシーの波は鎖を通じてローザの子宮に届いた。

「ブ、ブリジット……あああつ……私も……イクッ！ イっちゃううッ！ ああああつ！」

アクメの余韻が引く前に、すぐさまブリジットの官能の波が押し寄せてきて息つく暇もない。ピクピクと痙攣する媚穴のすぐ上から、黄金の痴水がジョロロと漏れ出した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元
ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

KTC特載スポーツオムニ
今年も発売!! (誌上限定発売)

監獄戦艦3!

偶数月
17日発売

落書きエロソロ!

943円 vol.75 04
2014

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

02 2014
price 680yen
今年も宜しくお願いします!

不思議Hの世界へ
参ります!

コミック
OMIC UNREAL
ファンタジー

奇数月
12日発売

Illustrated by
モグダン

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

MEGAMI CRISIS
Vol.16

対魔忍アサギ3
高浜太郎 原作:Anime LILITH

奇数月
下旬発売

ヒロインが
さらに堕ちまくるアンソロジー!

943円

コミック O MIC UNREAL ファンタジー

メガミ グライセス

MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。